

幼児教育における「アート（Arts）」の意義と他教科への横断的可能性

山本将之*

抄録：「アート（Arts）」が「自己表現」の意を有し、その対象に幼児を含む場合、アートには「遊び」の要素が多分に含まれる。これを前提として行った保育現場での造形実践の結果、「活動の過程」にこそ、「幼児のアート」の意義が看取された。例えば「色を塗る」活動であれば、混色を楽しむ過程に幼児の気付きや試行が生まれる。この感動体験や主体性の芽生えが、一つに「幼児のアート」の意義ではないかと考える。また、素材や空間への働きかけによって生じる個々人の気付きや疑問は、小学校以降の教科教育の入口に繋がりと得ると考える。

キーワード：幼児造形、造形表現、造形あそび、幼児のアート、子どもと表現

1. はじめに

色や形に意思が介入する非自然物の全てがアート（デザイン）であり、機能面や心理面において人間の営みを根底から支えている。一方で、「アート（Arts）」は「自己表現」の意を有しており、その対象は幼児を含むと言える。つまりアートとは、社会に寄与する表現のみを指す言葉ではなく、幼児の何気ない線描をも指す言葉である。これを前提とした場合、アートには「遊び」の要素が多分に含まれると言える。

しかし幼児のアートは、「何が描いてあるかわからない」、「汚れる」といった大人の価値観や都合によって敬遠されることも多く、幼児教育におけるアートの意義が社会に根付いているとは言い難い。そこで本稿では、約一年に渡る保育現場での造形実践の一部を例に挙げ、幼児教育におけるアートの意義を具体的に浮き彫りにする。

この造形実践とは、2020年度期間に大谷さやまこども園の午後保育の時間（約1時間程度）を利用し、筆者が定期的に行った造形あそびである。当実践の主たるねらいは、混色や身体操作、多素材の感触を楽しむことである。

本稿では、上記の造形実践の中から「色に働きかける造形あそび」と「空間に働きかける造形あそび」の2点を抽出し、それぞれの実践の概要を報告するとともに、それらの実践で看取された幼児教育におけるアートの意義を具体的に記す。併せて、アートが及ぼす他教科への

横断的な可能性についても考察を試みたい。

2. 造形あそび

2.1 色に働きかける造形あそび

色に働きかける造形あそびでは、パスを用いた造形あそび【写真1-3】の概要を報告する。この造形あそびでは、3-5歳児の約20名を対象とした。環境設定として、三角・四角等の色紙を配置したロール紙を3枚準備し、1つは横長に、2つは縦長になるよう壁に設置した。また、黒の全紙3枚と、複色色のダンボール紙3枚を床に設置した。そして、前章のねらいに応じて、縦長のロール紙ではジャンプや走りながらの描画を、ダンボール紙ではパス描画に伴うギロのような音の発生を想定した。

実践の結果、上述の身体操作や音への興味に加え、ダンボール紙の溝への塗り込みや、三角・四角等の紙の見立て、汚れることへの抵抗感の緩和などが見られた。



【写真1】パスを用いた造形あそびの様子



【写真2-3】ダンボール紙と黒の全紙への描画の様子

*大阪大谷大学教育学部

2.2 空間に働きかける造形あそび

空間に働きかける造形あそびでは、木片を用いた造形あそび【写真 4-6】の概要を報告する。この造形あそびでは、4・5歳児の約40名を対象とした。導入では、多様な形の木端を動物に見立てた後、その木端に色を付け、思い思いの動物（生き物・無機物）を表現した。その後、その見立てた生き物が住む街を、木片の構成によってつくり上げた。

実践の結果、木片を並べて部屋に見立てる表現や、積み重ねて家に見立てる表現が生まれた。異年齢合同で行ったことにより、平面的・立体的な広がりも混在する造形空間へと発展した。またそれぞれの部屋や家が木片の道で繋がったことにより、個々の活動から協働的な活動へと発展した。



【写真 4】 木片を用いた造形あそびの様子



【写真 5-6】 子どもが制作した造形物

3. 幼児教育におけるアートの意義

本章では、前章の造形あそびで看取された特徴的な子どもの姿を抽出し、幼児教育におけるアートの意義を考察する。

パスを用いた造形あそびでは、身長よりも高い位置に色を付けるためにジャンプの仕方を工夫する姿が見られた他、ダンボール紙の凸面を素早く描画することで生まれる音に興味を持つ姿が見られた。また、凹面に塗り込んだパスの滑らかな触り心地を楽しむ姿や、紙を叩く反動によって、置いたパスが浮き上がることを発見する姿、養生テープに色が乗らないことを不思議に思う姿、混色による色の変化に気付く姿などが見られた。

木片を用いた造形あそびでは、平面に並べた木片を波に見立てる姿、立体的に積み上げることで二階建ての家

をつくろうと奮起する姿、煙突を立てるために木片のバランスを取ろうとする姿、複数の細長い木片を用いて、カリンバのような楽器をつかって音を楽しむ姿などが見られた。

上記のように、造形あそびでは「活動の過程」にこそ、幼児の試行錯誤や実験的行為が存分に表れることが確認された。楽しいと感じる身体操作や素材への介入によって生じる気づきや疑問を追求する姿は、まさに「学びに向かう力」であり、主体性や自立心の萌芽に繋がると言える。造形あそびには見本が無く、どのような制作過程も受容される。ゆえに、安心して興味を追求できる活動と言える。色が変化することに驚いても良く、不安定な木片の組み立てに挑戦しても良いのである。このような試行と思考によって生じる感動体験や主体性の芽生えが、一つに「幼児のアート」の意義ではないかと考える。

4. 他教科への横断的可能性

造形はあらゆる学問と深い繋がりを有すると言える。例えば、混色による色の変化は科学への入り口であり、木片を並べる際の空間認識はスポーツにも求められる。また、重心を見据えた形態構成には数学的論理が不可欠であり、空間を時間軸に置き換えた要素の構成（配置）は音楽や文学に類似している。

どの学問も掘り下げると根の部分で繋がっており、学術が果てなく深いことを認識させられる。一方で、学問の入口には「遊び」がある。この「遊び」とは、前章の通り、「試行錯誤」や「実験」の意を含んでおり、「楽しい」という感情をもって興味を追求することを前提としている。また第1章の通り、遊びにはアートの意味が内包されている。つまり幼児のアートは、個々人の興味や疑問を誘起するだけに留まらず、アートによって湧き起こる感覚は他教科への入口にも繋がりと考える。

5. おわりに

本稿では、保育現場での造形実践を例に挙げ、幼児教育におけるアートの意義を考察した。その結果、「活動の過程」にこそ、「幼児のアート」の意義が看取された。例えば「色を塗る」活動であれば、混色を楽しむ過程に幼児の気づきや疑問が生まれる。この感動体験や主体性の芽生えが、一つに「幼児のアート」の意義ではないかと考えた。また、素材や空間への働きかけによって生じる個々人の気付きや疑問は、小学校以降の教科教育の入口に繋がりと考える。

(2021年1月5日 受理)